JWSF
Japan Wheelchair Seating Foundation

日本車椅子シーティング財団
財団通信 2025年 春号

2025年3月4日　No.18

一般財団法人日本車椅子シーティング財団 〒103-0012中央区日本橋堀留町1-10-1カクタビル2F
http//www.wheelchair-seating.org/　e-mail:info@wheelchair-seating.org

Contents

1. 2025年度の活動について

2. 寄稿
日本車椅子シーティング財団新春セミナー報告
一般社団法人日本車椅子シーティング協会国際委員
松本和志氏

3. 新理事の紹介
永松英範氏
(でく工房顧問)

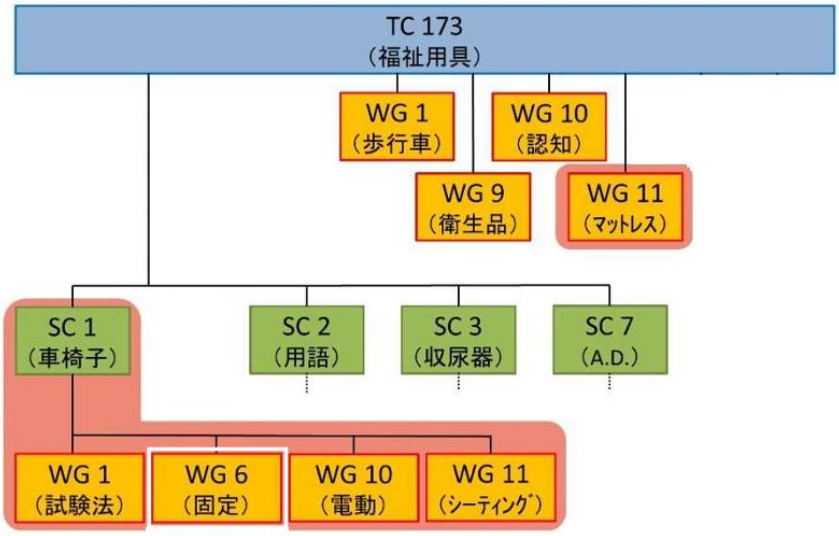
一般財団法人日本車椅子シーティング財団の2025年度の活動について

日本車椅子シーティング財団 代表理事　木之瀬隆

一般財団法人日本車椅子シーティング財団は、2016年に設立し、2017年に診療報酬のシーティング算定、2021年の介護保険改正では介護報酬にシーティングが入るなどの活動を行ってきました。2024年度はそれらの普及啓発活動、発達障害領域のプロジェクトの報告会を行いました。普及啓発活動は、第２回医療機関のシーティングセミナー、摂食咀嚼嚥下のシーティングセミナーの開催を行いました。国際福祉機器展においては、加島副代表が座長となりWHOの下部組織である国際車椅子専門家協会(ISWP）の専門家を招いて適正な車椅子へのアクセスなどの世界的な車椅子シーティングの状況についてセミナーなども開催されました。

2025年度は上記の活動をより促進し、世界のシーティングを取り巻く状況にも目を配りつつ、国民の寝たきり予防から自立支援に向けたシーティングの展開を進める予定です。その一つとして１月18日にはオンラインセミナーとして、「シーティング　世界最新動向を探る」を開催しました。ISS・ESS・ISOの状況については、埼玉産業技術センターの半田隆志氏より解説がありました。半田氏はISO規格開発ワーキンググループの国際座長、シーティング分野のISO規格全般を担当しておられます。参考にシーティング分野のISO規格図をおかりして掲載させて頂きます（図）。車椅子・シーティング・支援技術をめぐる21世紀の世界：世界保健機関（WHO）の資料を中心に一般社団法人日本車椅子シーティング協会の松本和志氏に解説して頂きました（詳細は次項）。

これからの予定では、仮）シーティングによる身体拘束予防、障害を持つ子どものシーティングセミナーなどが計画中です。また、学会シンポジウムで次が企画されています。
医療機関から施設・在宅までの多職種連携のシーティングを考える
日本義肢装具学会　2025年11月8日（土）・9日（日）. 会 場. 朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター



（図）半田氏によるISOシーティング関係規格図

日本車椅子シーティング財団新春セミナー報告

一般社団法人日本車椅子シーティング協会 国際委員　松本和志

はじめに

さる1/18に開催された一般財団法人日本車椅子シーティング財団新春セミナーの講師のひとり、一般社団法人日本車椅子シーティング協会（JAWS）国際委員の松本と申します。同セミナーの内容に関し、以下報告申し上げます。

半田隆志氏講義「研究開発および企画開発の動向と世界的な連携について」

財団の川畑事務局長、木之瀬代表理事のご挨拶に続き、講師二人のうち一人目、埼玉県産業技術総合センターの半田隆志氏より、半田氏の姿勢保持との関わりのきっかけ、座位姿勢測定機器開発の経験のご紹介に続いて、講義の主題であるシーティング分野の国際標準化機構（ISO）規格に関して、また国際シーティングシンポジウム（ISS）の紹介と半田氏の発表、また半田氏が規格開発ワーキンググループの座長も務められているISOの組織構成や意思決定過程、さらにシーティング分野の最新動向や世界的連携などに関してお話しいただきました。

お話のうち私自身が特に勉強になった点、印象に残った点としては、

・ISOなどの規格による標準化は機器・用具の開発のみならず使用にも関わり、互換性・利便性の向上や品質保証など使用にも役立っている。

・条約や法令と違い、規格は強制ではない利便性向上のためのルールである。その策定プロセスは政府など公的機関以外にも開かれており、影響力を行使できる（シーティング分野のISO規格でも、米国メーカーの異議申し立てを受けて変更された例がある）。

・JISをはじめとする国内規格は国際規格を基礎として定めることを世界貿易機関（WTO）も定めており、異なる規格は非関税障壁になりうる。逆に、そうした国際規格づくりを通して諸外国に影響を与えることも可能（日本はそうした働きかけが欧米諸国に比べ弱いとのご指摘も）。

・車椅子・シーティング関連のISO規格開発ワーキンググループのうち、半田氏が座長を務めるTC173/SC1/WG11が主にシーティングに関する規格を担当しているが、日本国内規格になっていないため、日本ではあまり知られていない。

・このワーキンググループでは例えば座位姿勢の計測および計測機器、座クッションの沈み込み性能計測方法、姿勢保持機器の共同試験方法のなどの規格を定めている。

・また規格とは別にISOが発行する参考資料・マニュアルとしてTR（技術レポート）とTS（技術仕様書）とがあり、これらを通して使い方のベストプラクティス、一般的慣行、最新情報を知ることができる。例えば車椅子シーティングに関してはISO/TR16840-15が発行されているが、日本語にはなっていない。

・例えば体圧分布測定に関する推奨事項はTR、褥瘡発生メカニズムに関する基礎情報や姿勢保持ベルトの選択と使い方のマニュアルなどはTSに記載されている。

・経産省も国際標準化の促進を掲げており、国際的な優位性確保の観点からも、ルールを守る側から積極的に作る側への転換が期待されている。

・半田氏が座長を務めるISO会議での最近の議題には、シーティングアセスメント表の様式、コンピューターシミュレーションによるシーティング評価、バックサポートの温湿度状況の評価方法、ダイナミック・シーティングシステムの定義・評価方法、座クッションのせん断力発生特性の評価方法などの世界規格化が上がっており、それぞれ専門性が高いテーマでもあり、多くの日本の専門家の参加に期待している。

・国際的シーティングシンポジウム、ISO、世界保健機関（WHO）、国際車椅子専門家協会（ISWP）などの組織の間には公式・非公式の人的つながりが強く、参加することで見えてくる事情もあり、それが継続して参加する意義の一つでもあると考える。

などがありました。特に半田氏にご紹介頂いた、車椅子シーティングに直接関連する技術仕様書ISO/TR16840-15に関してはJAWS会員の業務に関わる部分でもあり、JAWS国際委員会でもこれから入手と読解を進めて行きたいと考えております。

半田氏が座長を務めるISO技術委員会のウェブサイト

松本和志講義「車椅子・シーティング・支援技術をめぐる21世紀の世界～WHO（世界保健機関）の資料を中心に」

続いて私から上の演題でお話しいたしました。まず自己紹介に続き、JAWS国際委員会のWHO資料の翻訳事業の経緯を簡単に説明しました。

当委員会では2018年よりWHOの車椅子・シーティング関連資料の翻訳と公開に取り組んでおり、昨年までに車椅子ガイドライン（2008年版・2023年版）、支援技術に関する世界報告書、車椅子サービス教習パッケージなどの主な資料（動画、スライドなど視覚資料も含め）を全訳し、JAWSのウェブサイト(URL: https://j-aws.jp/who/)にて無償公開しております。それは、これら文書の存在や内容の重要性に加え、読み物として面白く（本当です）、また当委員会の海外への技術支援事業であるアジア姿勢保持プロジェクト（ASAP）の課題である講習教材づくりの参考資料、質的ベンチマークとして有用だったことが私どもを動機づけてきたためでもありました（ぜひご一読頂ければ幸いです）。

さて本題の車椅子・シーティングをめぐる世界の潮流ですが、多くの資料を自分なりに以下の順序で整理してみました。

A 国際的な条約・決議→
B それを支え、国際機関と協働すべく設立された国際的ネットワーク(とくに近年、インターネット普及に伴い活発化)→
C それに伴う、Aの各国による履行を支援 し国際的な指針を与える文書（指針文書）→
D さらにCのよりよい履行を支援するプログラムや教習教材

（もちろん現場からのフィードバックや優れた実践例（グッドプラクティス）、ネットワーク組織の提言や活動が条約・決議に反映されるなど上に向かう流れもあるため、この図式はやや一面的でもあり便宜的なものです）

これに従うと、以下3つの流れを見ることができます：

1) 2005年～：車椅子供与の改善に向けた流れ
A 第58回世界保健総会決議23号、障害者の権利に関する条約→
C 手動車椅子供与の世界ガイドライン→
D 車椅子サービス教習パッケージ(WSTP)

2) 2012年～：支援技術供与の改善に向けた流れ
A 仁川方策（インチョン戦略）、持続可能な開発目標（SDGs）→
B 支援技術に関する世界協力(GATE)、国際車椅子専門家協会（ISWP、流れ1の実施主体という役割も担う）、世界障害革新ハブ（GDI Hub）→
C 優先的支援製品リスト（APL）→
D 優先的支援製品教習（TAP）

3) 2018年～：車椅子も統合した支援技術供与枠組みの確立に向けた流れ
A 第71回世界保健総会決議8号→
C 支援技術に関する世界報告書（GReAT）→
D 車椅子供与ガイドライン、支援製品仕様書およびその活用方法

この流れに沿って重要文書のいくつか、特に2つの車椅子ガイドラインと支援技術に関する世界報告書について簡単に紹介しました。そして、1～3の流れは繰り返しではなく、その中に車椅子や支援技術へのアクセスを、勝ち取るか与えられるべき「権利」から、万人に生まれながらに備わっている「人権」であるとする意識の進化があること、WHOのさまざまなガイドラインや教材資料はそうした人権保障や参加・インクルージョンの促進という目的について一貫していること、ゆえに世界的ネットワークと個別ニーズ・個別適合の重視、支援技術という包括的・製品横断的な枠組み形成と個々の製品の進化といった、一見違う方向に見える動きにも、人間中心の支援技術供与確立、という一貫した底流が感じられる、という指摘をまとめとしました。（次項へ続く）

左から2008・2023年のWHO車椅子ガイドライン日本語版

支援技術に関する世界報告書・英語原版(左)と日本語版(右)

おわりに

質疑応答では、日本でのシーティングシンポジウム開催の可能性や課題についてご質問を頂きました。交流を通じて近年のアジア諸国の経済成長、シーティング分野での製品や研究の発展を体感して来た者としては、アジア諸国との共同作業として車椅子シーティングに関するネットワーク形成を推進し、その中で日本の技能や経験を活かして行くことが一つの道ではないかと考えています。JAWSが関わるさまざまな講習も、上記ガイドラインの枠組みを参考にしながら国際基準に応える再編成を進めており、私どもの取り組みが多少とも役立つことを念願しております。WHO障害グループの担当者とも相談し、JAWS国際委員会の翻訳・資料集成事業では、来年度の目標として上記「優先的支援製品教習（TAP）」の翻訳を検討していますが、これは車椅子シーティングに留まらない広範な基礎的支援製品に関する講習プログラムであるため、他団体の協力も得ながら進められればと考えております。末筆ですが、今回の貴重な機会を賜った日本車椅子シーティング財団に心より御礼申し上げます。

WHOが提唱する支援技術の「5つのP」枠組み

Profile
松本和志／2015年より途上国でのシーティングの普及振興を支援する日本車椅子シーティング協会(JAWS)国際委員会アジア姿勢保持プロジェクト(ASAP)事務局。2018年よりJAWSの資料作成事業としてWHOの車椅子・シーティング関連資料翻訳を主宰。現在JAWS国際委員会委員長とアジア姿勢保持プロジェクト事務局長、テキスト・カリキュラム委員を兼任。

新理事の紹介

ながまつ　ひでのり
永松 英範 氏

この度、当財団に就任いたしました永松英範です。評議員、理事、役員の皆様と御縁頂きました事は誠に名誉なことと感謝しております。

私は九州佐賀の出身です。現在はでく工房顧問として勤務しています。上京して40年になり、主にフランスベッドで医療福祉業界・ホテル業界・リネンサプライ業界に関わっておりました。またFB中国現法の経営・FBタイ現法の支援・医療介護ベッド安全普及協議会の設立運営・アパコーポレート倶楽部理事等の活動に関わっておりました。

専門的に深堀りしていくことは出来ませんが、当財団の基盤強化の為、関連団体との関係構築強化や法人賛助会員や個人賛助会員の拡充、セミナー参加者の動員に微力ですが注力する所存です。

半世紀以上の長きに渡り会社員として勤める中、組織としてのあり様や人として生き様を学んだ経験を活かし続けております。礼節は人としての基本の考えで、正義・義理・恩義の３つの義を大事に行動しております。

至らぬところ多々ありますが、今後は木之瀬代表を始め皆様の限りない御指導を賜わりながら、高齢者のシーティング(姿勢保持)の啓蒙啓発活動に取り組んで参ります。何卒、宜しく御願い申し上げます。

【編集後記】
シーティングが普及するとどんなメリットがあるのだろう。それは一言で言うと自分らしい尊厳を持った生き方をするために必要な手段を得ることなのではないだろうか。最後まで自分らしく生きたいというのは誰もが持つ思いだろう。シーティングの普及は人々の尊厳を守るために取り組むことなのだと改めて思う。もっと多くの人々にシーティングの恩恵がもたらされることを思うこの頃である。（事務局　川畑）